

## ラフカディオ・ハーンのジャーナリズムにおける 自己言及のスタイルの原点

スティーブ・ケンメ (日本語要約 水野真理子)

### はじめに

ハーンの作品の魅力は、感覚や感情に強く訴えるという点です。鮮やかな描写、詩的な言葉、そして啓蒙的な見解が作品にあふれています。しかし、その魅力を支えている別の要素は、作品に見られる視点であります。

ハーンは単に第三人称で記録するような中立的な語り手ではなく、彼自身を登場させ、自身の経験や感覚を物語の中に組み込ませたのです。これは、彼が 1960 年代、70 年代のアメリカのニュージャーナリズムの先駆者だと言える一つの理由です。

ハーンがはじめて、物語の中に自分を登場させたのは、1870 年代、『シンシナティ・インクワイアラー』『シンシナティ・コマーシャル』の記事においてです。当時、第一人称の「I 私」は新聞の文体として禁じられていたので、それは使わずに、代わりに、「この記者は」とか第一人称・複数の「we 私たち」を使用しました。ユーモラスなストーリーでは、「the Dismal Man その憂鬱気な男」や「the Ghoul グール 猟奇的な男」と称したりしました。

自身を物語内に登場させることで、ハーンは「読者たちを、楽しませること、驚愕させること、そして教育すること」という三つの目的を達成することができました。特にハーンはシンシナティの社会を改革したいという思いもあり、極貧の人々の存在を、上流階級の人々に知らせたいと考え、このテクニックを使用しました。また、無味乾燥になりがちな新聞記事に、人格の特徴や鮮やかさを加えるために、この手法を続けてそれを磨いていきました。

### 1)

はじめてハーンが自己言及のスタイルを『インクワイアラー』で使ったのは、1872 年 11 月 29 日の記事、「わが地域の気象予報士」においてです。このときハーンは記者として働きはじめて 5 週間後のことでした。当時、気象予報士と彼の助手たちは気象データを集め、電報で国の機関に送っていました。ハーンは自分自身を『インクワイアラー』社の歩く紳士」と称しています。

記事の半分あたりで、ハーンは気象予報士を「Observer 観測者」、自身を「Reporter 記者」と称して、インタビュー形式に変えています。そのインタビューの終わりで、気象予報士は、『インクワイアラー』のみが予報士の気象についての報告を掲載していないのだとハーンをたしなめています。

この記事において、ハーンは科学的なテーマを、読者にとって楽しく面白いものにしようと試みましたが、まだ硬さや無理矢理なユーモアがあります。若干 22 歳の新人ライターだった

ので、作品を作る基礎を学んでいく途上にありました。

## 2)

ハーンは特集記事においても、自身を登場させることによって、記事の記述を活気づけ、魅力的なものにしたいと考えていました。『インクワイアラー』社で働きはじめてから 8 か月経った頃、「給与支払い列車」という特集記事を書きました。その列車は、沿線上で働いている鉄道労働者たちに、会社の給料支払い係が、給料を支払って回るというものでした。

その一日ががりの旅で、多くの鉄道労働者に出会いました。自分のことを『インクワイアラー』社の者」とし、給与支払い係との会話で、ストーリーを始めています。支払い係はこう言います。「私に同行するなんて、馬鹿なことを。記者というのは、自分が望むのならば、正しいことができるものだ。でもあんたは、自分で望んではないじゃないか。君は見たところお腹がすいているようだし、だから少し君を連れ出して、食事を食べさせて、新鮮な空気を吸わせたいだけなんだ。だから君を誘ったんだ。しかし、君が本当にこの支払い列車の記事を書きたいのなら、実際に見たことだけを書いてほしい。」これに対してハーンは、「自分は他の腹黒い新聞記者よりはずっと正直な人間です」と言って、支払い人を安心させました。

## 3)

ハーンは『インクワイアラー』社を 1874 年の夏に辞職して、ヘンリー・ファーニーと共同経営で、風刺的週刊新聞『イエ・ギグランブス』を立ち上げました。しかし、経営が困難で、数週間で再び『インクワイアラー』に戻りました。その後すぐ、編集者に言われ、森林の中で行われるキリスト教メソジスト派「信仰覚醒キャンプ」の記事を書くことになりました。

1874 年 9 月 13 日の日曜の第一面を飾った記事で、彼は自分自身を、信仰覚醒キャンプに参加するにはふさわしくない人物として描いています。「この『インクワイアラー』社の者は、祈るためにキャンプに来たのではなく、自分よりも信心深い人々が祈りをささげるのを見るために参加した。」と書いています。

祈りの時間には宗教心についてではなく、女性の様子に関心を寄せて、女性の身体的な描写も行いました。近代のジャーナリズムでは、特に女性について、性的だと感じさせるような描写は、避ける傾向がありました。信仰深い読者が、不適切な描写だと感じるかもしれないとハーンはわかっていたと思うのですが、学生がつい教師に反抗したくなるように、ハーンも、女性の身体的特徴をあえて書きました。

キャンプでの第一日目の夜、テントの中いる人物に起こった出来事を、息もつけなくなるような描写で描いています。「そこには二人の背の高いシルエットが立っていた。一人は眼鏡をかけた鼻の長い女性、もう一人は白鳥のような首をした引き締まった体形の、まつ毛が長く豊か

な髪をした小柄な女性。その細い腕が、母のような女性の首の上にもわされ、ぷっくりした唇がすぼんだ。そして薄いしわの寄った唇がそれに応えた。二つの影は融け合い、白いキャンパスの上に大きな黒い点となった。記者の唇もじつりと濡れた。」それは教会の会報には決して掲載されない出来事でありました。

#### 4)

また、1876年5月下旬のある日、シンシナティのダウンタウンにある、聖ピーター教会堂の尖塔に登って、その様子を記事に書くことになりました。1876年5月26日付けのこの記事は、エンターテイメント性の最も優れたものとなりました。

ハーンの不安がどんどん増すなか、編集者たちとみなで、教会堂の中の、長く狭い階段を上っていき、てっぺんの時計台にたどり着きました。教会堂の頂上部にたどりつくには、鐘の間をぬって、窓の外に体を出して上部へ行かなければいけません。命綱をつけたハーンは怯えながらも、窓から頂上の十字架にかけられた梯子を上っていき、何とか十字架に手が届きました。ハーンは十字架の上に座り、そこから見える街の素晴らしい景色を楽しみました。目の悪いハーンだったので、遠くまではよく見えませんでした。読者にはその景色の素晴らしさが十分に伝わったと思います。

ハーンはここで、へまをしがちな臆病者として自身を描きました。それはもしバスター・キートンやチャーリー・チャップリンなど20世紀初頭の喜劇映画であれば、完璧であったと思われる描写でした。

#### 5)

ハーンは、女性に扮装して、カトリックの修道女の講義を聞きに出向いたこともあります。イーディス・オーゴーマンは、悪名高い反カトリック論者ですが、彼女がシンシナティに来て、彼女が目撃した恥じるべき出来事について話しました。

ハーンはもちろんそこに乗り込みました。金髪のかつらをつけ、ドレスを着、女性用の手袋とボタン付きのブーツをはいて出かけたのです。ある女性が「男性がいる！」と叫んだときには、しまったと思いました。幸い女装した別の男性のことでハーンではありませんでした。

1874年の1月22日のこの記事においては、素性がばれてしまうかもしれないという恐怖、オーゴーマンのスキャンダルな話への驚き、参加者の様子が主に描かれました。オーゴーマンの講義は卑猥な言葉で満ちていたので、彼女の講義の内容自体についてはあまり述べていません。

## 6)

「性」に関する問題については、いくらか自制しましたが、人々が恐れるような血まみれの話については、ハーンも編集者たちも遠慮せずには書きました。1874年3月の記事「死のダンス」においては、ジョー・ソーボーンという友人に医科大学の解剖室を案内されます。(ソーボーンが、“saw boans” 骨を見たというつづりの音と同じなので、これはハーンが冗談で作った名前なのかもしれません。) 聖ピーターの教会堂に上ったときのハーンは臆病者でしたが、今回はこの血みどろの場面を写實的に描いていても、ハーンはさほど怖がりませんでした。皮肉にも読者にとっては吐き気を起こさせるほどの記事だったのですが。

彼はある男性の死体について、「人間の骨、腱、神経と動脈の積み重ねで、血の塊でどす黒く、言いようのない匂いである。胴体の骨には、まだ腐った肉が付着しており、あばら骨からも微量の肉が垂れ下がっている。」などと描写します。

こうした恐ろしい光景の合間に、ハーンは、ジョー・ソーボーンの淡々とした無関心さもユーモラスに表します。「もう十分、見たよ」とハーンがジョーにいうと、ジョーは「何言ってんだ、俺はもっとひどい死体の隣で夕飯を食べるんだぜ。」と答えます。

## 7)

また別の記事では、子牛の血を飲むという経験も書かれています。1875年9月5日の『シンシナティ・コマーシャル』の記事では、いかにユダヤ人の屠殺所が、非ユダヤ人が経営する屠殺所よりも清潔かを示そうとしています。ここでは多くの屠殺所における残酷な処理と不衛生さをさらけ出そうとしています。しかし話の終わり近くで、ユダヤ人の屠殺所の所有者が、シンシナティの多くの屠殺所では、ユダヤ人が健康に良いと信じてよく牛の血を飲みにくるとハーンに説明します。そこでハーンも新鮮な血を一飲みし、「どんな化学者、菓子屋、ワイン職人が作ったものよりも美味しくて甘い」と言います。ハーンのこの血を飲むという記事は、20世紀に活躍して、不法ドラッグなどを使用する場面を描いたハンター・トンプソンの作品を思い出させるのですが、しかし、トンプソンが動物の血を飲むことまでしたかはわかりません。もしそうしたとしても、さすがにそれを作品に書いたとは思えません。

## 8)

ハーンはまた詐欺師の悪事を暴露することにも、この自己言及のスタイルを使いました。霊媒師が霊を呼び出してそれらと会話するという「スピリチュアリズム(心靈主義)」を取り上げました。19世紀半ばから20世紀初期にかけてスピリチュアリズムは人気を博し、数多くの詐欺師が人々から多額のお金を取っていました。

ハーンは友人で女性の霊媒師に誘われて、交霊術の会に参加するのですが、そこで不気味で

恐ろしい体験をします。最初ハーンは、霊に体が不潔なので会いたくないと拒まれます。そこで、ハーンは十分に清潔な身なりをして、第二回目の交霊術に臨みます。1874年1月25日の『インクワイアラー』での記事「霊魂に囲まれて」で、何度も風呂に入ったりなどいろいろ準備したことをユーモラスに述べています。

霊を呼び出す途中で、霊媒師は画鋏で彼女の着衣を床にはりつけました。暗い部屋で、誰かの指がハーンの手をコツコツと叩き、男性の声が語りかけてくるのですが、それはハーンの手元父だということです。その声は、ハーンにも「パトリック」とかつて父がしたように、その名前で語りかけました。記事では、ハーンはなぜ彼の過去についてその声を知っていたのか不思議だとしながらも、霊媒師に対しての疑いの気持ちは揺らぎませんでした。この話は、シンシナティ時代の作品の中で最も印象深く、ハーン自身を登場させたということが物語に力を与えています。三人称語りでは決して成し得なかった効果だと思えます。

## 9)

ハーンの時代には、墓泥棒も大きな問題で、死体を医科大学に売るとは儲かるビジネスになっていました。ハーンは検視官を伴って「ポッター墓地」へ出向き、墓堀人に質問をするという形で自分を登場させました。ここでハーンは自分を「Dismal Man 憂鬱な男」と称し、この暗くなりがちな話に、可笑しさを加えました。

墓堀人は空っぽの棺を埋めているということも告白します。

検視官「ここに送られてきた棺をすべて埋めるのではないのですか。」

墓堀人「棺はすべてです。」

検視官「というと死体はすべてではないと？」

墓堀人「ええ、私が棺を埋める前に取られてますからね。」

検視官「どうやって！」

墓堀人「いや、だって、一日でできる作業以上の棺がくるんですから。次の日まで放っておくのですよ。その間に彼らが盗んでいくんです。」

検視官「でもどこに放置しておくのです？」

墓堀人「墓のそばですよ。」

検視官「それで朝になってみて棺の中に死体がないと知ったとき、どうするのですか。」

墓堀人「埋めるだけです。一つに1ドル15セントもらえるんですよ。死体が入ってるのも入ってないのも埋めるのは大変ですよ。」

この描写で読者はあたかもその調査に同行しているような気持ちになります。こうしてハーンはこの事件の非道さを際立たせ、おまけに読むのをとても楽しくさせています。

## 10)

また、ハーンは、流産のために瀕死の女性たちや、売春目的の若い女性たちが働かされている不潔な家について記事を書きました。1873年7月27日の「汚れた巣」で、ハーンはなぜ暴露的な記事を書くのか説明します。

ハーンは街に潜む不正な側面を「悪臭漂うできもの」と称し、それを白日の下にさらすことが、ジャーナリズムの義務だと考えていました。ハーンはこれを、社会に見捨てられた人々が被る不当さだけでなく、持たざる人々の人間味を描くことによって成し遂げました。自分自身を登場させることによって、読者が、あたかも話の登場人物と実際に関わっているような気分にしたのです。

1874年2月15日の『インクワイアラー』の記事「ゆっくりとした飢え」では、わずかな賃金をもらって、卸売りの洋服業者のために働くお針子の女性たちを話題にします。彼女たちは自分の自宅で働くか、小さなグループを作って他のお針子の家で働いていました。ハーンは彼女たちの悲惨な生活を書くために、お針子たちの家を訪れ、インタビューをしました。彼女たちは週60～80時間働いて、その賃金はほんの2、3ドルだったのです。

お針子たちとの会話を盛り込んで、ハーンは彼女たちも人間であることを示し、物語に胸が締めつけられるようなエッジをきかせています。ハーンは彼女たちを、実態のわからない被害者として描くのではなく、一人の人間として、読者たちが自分たち自身と結び付けて考えざるを得ない気持ちにさせるのです。

## 11)

ハーンは、ごみを探し回り、服の切れ端を見つけ出しては、服飾商人らに売るという、くず屋についても書いています。あるごみ箱で、母親と幼い二人の息子ががらくたの山を漁っているのを見つけました。ハーンはこの惨状を表現するのに、再び対話表現を用います。その女性は「ゴブリンのような顔で、高い鷲鼻、深く窪んだ大きな黒目、長く大きな顎をしてごみ箱の汚れで真っ黒になっていた。」と描かれています。

ハーンは彼女の仕事について尋ねます。

ハーン「あの、他の仕事はなされないのですか、例えば洗濯やとか。体はお丈夫そうですし。」

くず屋「ええ、体は頑丈よ。でも、右手の腱を一年前に切ってしまってね、洗濯屋はあきらめた、以前はやってたこともあったけど。」

ハーン「そうですか、他の・・・もっと賃金の良い仕事をされるのはどうですか。」

くず屋「そんなことあんたと話したくないね、あんたと関わってる暇はないの。」

ハーン「あの、どこにお住まいですか。お時間があるときにお話しさせていただけないですか。」

くず屋「ああー、そういうことね！おあいにくさま、男とは関わりたくないの。私はまっとうに働いて暮らせますから。」

### 1 2)

ハーンはまたシンシナティに住むアフリカ系アメリカ人の人々の困難さや文化についても書いています。その頃、シンシナティは、アフリカ系アメリカ人人口が最も多い街でした。奴隷制を維持しているケンタッキー州に接し、シンシナティは逃亡奴隷たちにとっては自由の灯台と映り、彼らは南北戦争以前もその間もシンシナティに逃げて居住していました。

ハーンは白人読者たちを、アフリカ系アメリカ人の街を描く鮮やかなストーリーの中に引き込みました。そこで彼は自身を「編集者の私たち」と称しています。彼はジョットという男性が住む、街の裏の隠れ家を訪れました。彼は、ブードューの呪術を行うので、皆が彼を恐れていました。

### 1 3)

別のストーリーでは、ハーンは「ヘンリー・オールド・マン・ピケット」が経営する地下施設へ入って行きました。彼は川の堤防に沿ったソーセージ通りと呼ばれる通りに、いくつかのサロンや売春宿を所有していました。1875年2月21日の『インクワイラー』の記事で、当時、浸透していた人種のステレオタイプにも関わらず、ハーンはピケットを美德と不徳を持ち合わせる人間として描いています。時には法も侵し訴えられますが、お金の無い人に食べ物や住むところを与えてあげる親切な人物だったからです。ハーンは、白人の人々がほとんど知らないシンシナティの深部に入って、鋭い洞察を行ったのです。

### おわりに

どのようなキャラクターをハーンが語り手・参加者として自分の作品の中に登場させたとしても、時に悪戯好きな人物、へまをしてしまう人、暴露記者や鋭い観察者としてでも、自己を登場させるという手法は、読者を楽しませ、驚きを与え、彼らの目を開かせました。こうすることによって、彼は読者たちの世界を広げ、そして彼の生涯にわたる執筆活動の基礎を築いたのです。

注) 読み易さを考慮し、訳者が段落番号を付した